

直面する問題は、その持

舞踊記譜法

るく 楽しい, 美しい感じ


舞踊譜記録の方法

- 踊跡については、9等分した正方形の空間を使って記録し、動きはじめをS、終りを

Fで示す。

水準については、最高位…ジャンプした高さ、高位…つま先立ちの高さ、やや高位…立位の高さ、中位…屈膝立の高さ、やや中位…立て膝の高さ、低位…膝ついて坐った高さ、最低位…床に臥した高さ、とし斜線で示す。

面の使い方については、○…前面、●…背面、-○、○-…側面、とする。

移動の方向については、→…直線的移動で左進、…曲線的移動で右進、
・…その場で、とする。

2. 方 法

(1) 期間および対象

期間 1回目の創作…昭和45年2月

2回目の創作…昭和45年5月

対象 本学体育科1年生48名中、1回目の創作における上位5名、下位5名

(2) 実験方法

同一テーマで創作させた作品から、上位5作品、下位5作品を選び、舞踊記譜法に基づいて分析したものについて、比較検討し、さらに期間をおいて、再度創作させたものについて、分析比較を試みた。

(i) 順位決定は、本学ダンス指導者2名の評価による。

(ii) テーマ決定については、対象48名に、予め創作したい内容を調査し、その結果、「心」を共通のテーマとし、それぞれのサブ・テーマ選択をさせ、創作させた。

(iii) 1回目の創作より2回目の創作の間の学習過程については、1回目の創作作品を全員に相互評価させたのち、V.T.R.に収録した作品を見せることにより、反省させ、これらをふまえたうえで、2回目の創作にあたらせた。

3. 考 察 と ま と め

各作品の全体的構成は表1(39頁)のとおりであり、以下、これに基づき考察を進める。

〔1〕 上位5作品と下位5作品の各要因の比較について

表 2 上位5作品、下位5作品の各要因の比較

要 因	上 位	下 位
イ メ ー ジ 内 容	構想が練られ、動きへの広がりを感じられる。	テーマのうけとり方が浅く、動きへの発展の限界を感じられる。
作品の長さ	やや長い。	短い。
伴 奏 音 楽	電子音楽、現代音楽、secondの音などをくふうし、組み合わせ、表現効果として生かしている。	リズムが単調で、主メロディーの反復が多く、曲に制約をうけている。
動きのまとまり	変化と統一のくふうがみられる。	反復、類似が多く単調である。
動 き	テーマ、内容に適した練られた動きであり、多様で、動きから動きへの移行が安定した流れとなって続いている。	同じ動きの反復が目立ち、動きの配列が悪く、流れが不安定である。

動きのリズム		リズムパターンの長さが種々で、リズムの種類も多く、アクセントの感じられるリズムが多くみられ、複合のしかたも複雑である。	リズムパターンの長さが一定で、リズムの種類も少なく、基礎リズムのくり返しが多くみられ、複合のしかたも単純である。
空間構成	水 準	中位の高さをもっとも多く使い、高位、低位を同程度に使っている。	高位を極端に多く使い、次に中位で、低位の使用は非常に少ない。
	面	上位・下位の差はほとんどみられない。	
	移 動	上位・下位の差はほとんどみられない。	
踊 跡		上位・下位の差はほとんどみられない。	

〔2〕 2回目の創作にみられた変化の様相について

- (1) 全体のレベルは、1回目に比して2回目はかなり向上している。とくに顕著なものは、動きのまとまり、動きの習熟度であり、上位はその伸びが大きく、中位はやや伸び、下位はほとんど伸びがみられない。
- (2) 上位の作品において、もっとも変化がみられたのは動きで、次に動きのまとまり、水準、踊跡の変化であり、あまり変化がみられなかったのは、イメージ、作品の長さ、伴奏音楽である。
- (3) 下位の作品において、変化がみられたのは、動き、身体の面、踊跡であり、まったく変化がみられなかったのは、イメージ、内容、伴奏音楽、水準である。

このことから、作品創作にあたる際の重点のおき方は、上位が内容、動きの流れ、空間構成の順であり、下位は動きを練ること、空間構成の順のように思われる。

〔3〕 2回にわたる創作における各作品別要因の変化の様相について（上位作品…A, B, C, D, E 下位作品…V, W, X, Y, Z）

表 3 作 品 別 要 因 の 変 化 の 様 相

作品	要 因		1 回 目	2 回 目
A	イメー ジ内 容		構想が練られている。	1回目と同様。
	作品の長さ		内容に対し適当である。	短かすぎる。
	伴 奏 音 楽		内容に適している。	1回目と同様。
	動 き の ま と ま り		多様で統一がある。	1回目と同様。
	動 き		内容にあった動きで練られていて、習熟された動きである。	まとまりC、C'の部分を変化し、全体の盛り上りを弱める結果になっている。
	動きのリズム		ほとんど基礎リズムであり、複合リズムがわずかである。	1回目と同様。
	空 間 構 成	水 準	中位の使用が目だって多く、高低の変化に乏しい。	高低の変化のくふうがみられる。
		面	前面の使用が多く、背面、側面の使用が少ない。	1回目と同様。
		移 動	その場での動きがやや多く、次に直線、曲線の移動がみられる。	1回目と同様。
	踊 跡		表現内容にあっている。	空間を大きく移動したため、表現効果を弱めている。

		順位	1 位	3 位
B	評 価	順位	有効な変化が水準にしかみられず、作品の長さ、伴奏音楽、動き、踊跡などを変化したことによって、かえってイメージ、内容の表現性が生かされず順位が下がった	
	イメー ジ内 容		構想が練られている。	1回目と同様。
B	作品の長さ		内容に対し適当である。	1回目と同様。
	伴奏音楽		内容に適している。	1回目と同様。
	動きの まとまり		多様すぎて統一に欠ける。	整理されてまとまりが感じられる。
	動き		内容にあった動きで練られているが変化が多すぎる。	後半に 'a (a に類似した動き) を配列したため動きの統一がみられる。
	動きのリズム		ほとんど基礎リズムであるが、複合リズムが多く、複合のしかたをくふうしている。	1回目と同様。
	空間 構 成	水 準	中位がやや多く、高位、低位の順に使用している。	中位がやや多く、高位が減り、低位がやや増している。
		面	前面の使用が非常に多く背面、側面はわずかである。	前面がやや減り、背面が増し、側面が減少している。
		移 動	その場での動きが多く、次に直線で、曲線が非常に少ない。	その場での動きが多く、直線がやや減り、曲線が増している。
	踊 跡		表現内容にあっている。	空間を大きく移動しすぎたため、表現効果を弱めている。
			順位	2 位
	評 価		動きのまとまりと動きの一部分を変化したことで、この作品の全体構成は高まったが、踊跡の変化によりやや表現効果を弱めている。	
C	イメー ジ内 容		構想が漠然としていて練られていない。	表現内容が具体化し構想が練られている
	作品の長さ		内容に対し短かすぎる。	1回目と同様。
	伴奏音楽		内容に適している。	1回目と同様。
	動きの まとまり		多様で統一がある。	1回目と同様。
	動き		反復が多く単調である。	多様で盛り上がりがみられる。
	動きのリズム		シンコペーションのリズムがみられ、くふうされている。	ほとんど基礎リズムである。
	空間 構 成	水 準	中位が半分をしめ、高位と低位が同程度である。	中位が極端に減り、高位と低位がわずかず増加している。
		面	前面が大半をしめ、背面と側面がわずかである。	前面が減り、背面がかなり増し、側面がやや増している。
		移 動	その場での動きと直線が同程度で曲線がわずかである。	その場での動き、直線、曲線の順でその差はわずかである。
	踊 跡		渦巻状で単純、効果的でない。	複雑で表現内容に対し効果的である。
			順位	3 位
	評 価		イメージ、内容、動き、空間構成などに变化、くふうをしたことで作品の表現性が高まり、1回目の3位から2回目では1位へ上がったものと思われる。	
			順位	
			1 位	

D	イメー ジ内 容	構想が練られている。	1 回目と同様。	
	作品の長さ	内容に対し適当である。	1 回目と同様。	
	伴奏音楽	内容に適している。	1 回目と同様。	
	動きの まとまり	多様で統一がある。	やや変化がみられ、より統一が感じられる。	
	動き	内容にあった動きがくふうされ個性的。	やや変化がみられ、さらに個性的である。	
	動きのリズム	基礎リズムが多い。	1 回目と同様。	
	空間 構成	水準	中位が半分をしめ、高位、低位が同程度。	中位がやや増し、高位、低位が減少。
		面	前面、背面、側面ともに同程度である。	側面の使用が目立ち、背面が減少。
		移動	その場での動きが大半をしめ、次に直線で曲線はわずかである。	ほとんど 1 回目と同様。
	踊	跡	斜めの直線で単純、効果的である。	1 回目と同様。
評	順位	4 位	3 位	
	価	動きのまとまりと動きの一部分を変化したことにより、この作品の個性をより強めたようである。		
E	イメー ジ内 容	内容は練られているが種類が多すぎる。	種類が整理されて、統一されている。	
	作品の長さ	内容に対し適当である。	1 回目と同様。	
	伴奏音楽	内容に適している。	1 回目と同様。	
	動きの まとまり	種類が多すぎて配列が悪い。	種類が整理されて統一されている。	
	動き	内容にあった動きで練られているが種類が多い。	1 回目と同様であるが整理されている。	
	動きのリズム	基礎リズムが多い。	シンコペーションや ♩ とシンコペーションの組み合わせなど複雑なリズムのくふうがみられる。	
	空間 構成	水準	中位が半分をしめ、高位、低位の順である。	中位が半減し高位と低位が増加している。
		面	前面が多く、次に側面で背面はわずか。	前面が多く、側面が増し、背面が減少。
		移動	その場での動きと直線が多く曲線がわずか。	その場での動きが増し、直線、曲線が減少。
	踊	跡	表現内容にあっている。	1 回目と同様。
	評	順位	5 位	5 位
		価	内容構成、動きのまとまり、動きのリズムを変化させたことが作品を全体的にまとめたものに行っているようである。	
	イメー ジ内 容	構想が具体的に練られている。	1 回目と同様。	
作品の長さ	内容表現に対して短かすぎる。	1 回目と同様。		
伴奏音楽	リズムが単調でメロディーの反復が多く、内容にあわない。	1 回目と同様。		

V	動きのり まとまり		単純でくふうがみられず拙劣である。	1回目と同様。
	動き		単純でくふうがみられない。	1回目と同様。
	動きのリズム		基礎リズムのみで種類が少ない。	1回目と同様。
	空間構成	水準	高位が半分をしめ中位と低位が同程度。	1回目と同様。
		面	前面が半分をしめ側面、背面が同程度	ほとんど1回目と同様。
		移動	その場が多く、次に直線で曲線はわず か。	ほとんど1回目と同様。
	踊 跡		単純でくふうがみられない。	やや変化がみられるが単純である。
	評 価	順位	4 4 位	4 6 位
		価値	踊跡に変化がみられるだけで他の要因については、まったく変化がなく進歩がない。	
W	イメージ 内容		構想は一応立てられている。	1回目と同様。
	作品の長さ		内容に対し適当である。	1回目と同様。
	伴奏音楽		テンポが速く反復が多く内容にあわない。	1回目と同様。
	動きのり まとまり		一応まとまっている。	1回目と同様。
	動き		単純でくふうがみられず拙劣である。	多様な動きでくふうされ、かなり習熟している。
	動きのリズム		基礎リズムでその種類が多い。	1回目と同様。
	空間構成	水準	高位が半分で中位、低位が同程度。	ほとんど1回目と同様。
		面	前面が半分で次に側面、背面は少ない。	側面が減り、前面、背面の使用が増加。
		移動	その場が多く曲線が直線よりやや多い。	ほとんど1回目と同様。
	踊 跡		複雑であるが表現効果を上げていない。	ほとんど1回目と同様。
	評 価	順位	4 5 位	4 2 位
		価値	動きが身体全体を使ったものになり、また複雑、多様でくふうがみられ、作品に変化が加わって順位が上がったものと思われる。	
X	イメージ 内容		構想は一応立てられている。	1回目と同様。
	作品の長さ		内容に対し適当である。	1回目と同様。
	伴奏音楽		内容に適している。	1回目と同様。
	動きのり まとまり		一応まとまっている。	反復を多くしたため単調になった。
	動き		単純でくふうがみられず拙劣である。	変化させたため、一層単調で盛り上がりがない。
	動きのリズム		基礎リズムのみ。	1回目と同様。
	空間構成	水準	高位が多く、次に中位で低位はごく少ない。	ほとんど1回目と同様。
		面		

	間 構 成	面	前面がほとんどで背面がややみられる。	ほとんど1回目と同様。
		移 動	その場、直線、曲線の順でほとんど差がない。	ほとんど1回目と同様。
	踊 跡		単純でくふうがみられない。	ほとんど1回目と同様。
	評 価	順位	4 6 位	4 8 位
		価	空間、踊跡などの変化、くふうがみられず、動きのまとまりと動きを変化させたために作品の盛り上りが弱くなり、順位が下がったものと思われる。	
Y	イ メ ー ジ 内 容	イ メ ー ジ 内 容	テーマに対し内容があいまいである。	1回目と同様。
		作品の長さ	内容に対し長すぎる。	1回目と同様。
		伴奏音楽	内容に適していない。	1回目と同様。
		動きのまとまり	変化がなく単調である。	やや変化、くふうがみられる。
		動き	単純でポーズの連続が多く拙劣である。	連続した流れに変化、くふうしている。
		動きのリズム	基礎リズムのみ。	長短のリズムの組み合わせで変化した。
		踊 跡	空間全体を一周した形で表現内容にあわない。	中心に集中した形に変化させ表現効果を上げている。
	空 間 構 成	水 準	高位、中位が同程度で多く低位がわずか。	高位が非常に増し、低位がやや減少。
		面	前面が非常に多く、側面、背面がわずか。	前面が増し、背面がまったくなく側面も減少。
		移 動	その場、直線が同程度で多く曲線がわずか。	その場がやや増し、直線が減り曲線なし。
	評 価	順位	4 7 位	4 3 位
		価	動きのまとまり、動き、動きのリズム、踊跡の変化により構成が良くなり、順位がかなり上がったものと思われる。	
Z	イ メ ー ジ 内 容	イ メ ー ジ 内 容	内容が乏しく構想が練られていない。	1回目と同様。
		作品の長さ	内容に対し長すぎる。	極端に短かくしたため、内容が表わしきれない。
		伴奏音楽	テンポが速く変化がない。	1回目と同様。
		動きのまとまり	まったく変化がなく単調である。	1回目と同様。
		動き	単純でくふうがみられず拙劣である。	1回目と同様。
		動きのリズム	♩, ♪, ♫ のみの基礎リズム。	1回目と同様。
		踊 跡	空間の右半分を移動しすぎ表現効果が弱い。	やや広がりを見せるくふうをしている。
	空 間 構 成	水 準	高位が多く次に中位で低位はほとんどない。	1回目と同様。
		面	前面が半分をしめ、背面、側面が同程度。	前面が増し背面、側面が減少し平板である。
		移 動	その場が半分で、直線、曲線が同程度。	直線が増し曲線が減少している。
	評 価	順位	4 7 位	4 3 位
		価	動きのまとまり、動き、動きのリズム、踊跡の変化により構成が良くなり、順位がかなり上がったものと思われる。	

	順位	4 8 位	4 7 位
評 価		作品の長さや空間の使い方を変化させているがあまり効果がみられない。	

以上を総括すると、上位の作品は意図して内容が練られ、また、動きの種類や配列にくふうがみられ、動きのまとまりも変化と統一のくふうがあり、とくに、安定した動きで熟練度がみられ、テーマ、内容に対して表現の意図が高度な技術で高められているのに対し、下位の作品は動きのくふうのみに終始している変動の過程が感じられ、表現の意図と技術との関連が浅く、作品を未熟なものにしていると考えられる。ことに動きの技術については、上位と下位の比較において、粗協応の段階から精緻協応への発展の段階の一端がうかがえ、このことはダンス指導の体系化につながる手がかりであろうと思われる。

「芸術は技術である。だが、それはある特別な目的、すなわち表現形式、つまり本然の人間的感情を打ち出して、視覚、聴覚または想像力を通して知覚できる形式を創造することを目的とする技術である。」と S.K. Langer が述べているが、これはダンスにおける基本的概念とも、まったく一致することであり、本研究からこの技術の要因のうち、動きの習熟およびその構成、くふうがもっとも重要な要因であることが得られた。しかし、他の要因についても、さらに深く研究を進め、芸術性の高いダンス創作を目的とし、表現技術の体系化確立を急ぎ、系統的な指導法を打ち出したいと考える。

なお、本研究に協力していただいた本学講師、大久保和子、荒木恵美子両女史に対し、深く感謝の意を表す。

参 考 文 献

Principles of Dance and Movement Notation

	Rudolf von Laban 著
舞踊美の探究	松本千代栄著
芸術とは何か	S.K. Langer 著
体育学研究 第41巻第5号	日本体育学会
研究紀要 第12号	岡山県立短期大学
研究紀要 第13号	岡山県立短期大学
研究紀要 第14号	岡山県立短期大学

100

100